

# わかこと回カルの少年法 第 4.5 回

## 今月のテーマ：警察・捜査への思い、それぞれ

今週は先月号のつづきみたいなものです。先月は警察の捜査を見てきましたが、警察の介入についてはそれぞれ、いろいろな思いがあると思います。今月は4人の方に警察・捜査に関するご自分の体験を語っていただきました。（お一人は警察の介入を選択されなかった方の体験です）皆さんは警察・捜査に対し、どのように考えられるでしょうか…。

### 中学校教師の方

数年前に都内でも有名な荒れた中学校で講師をした。中学1年を担当したが、赴任当日から私はガツンと一発やられることになった。教室に行こうと廊下に出たらそこに生徒が座っている。「こんにちは」と声をかけるとその子が目を剥いて「うるせえ、この野郎！」と私に言ったのだ。いくらなんでも初対面の人間にここまで言う生徒にはそれまで会ったことがなかったので、このときはとても驚いた。

それから毎日、一部生徒の暴力にさらされることとなった。具体的には、ぞうきんや文房具などを投げつけられる、注意したら腹をなぐられる、つばを吐きかけられるなどである。一番ひどかったのは、逆ギレした生徒にパイプ椅子で顔を殴られたことだ。

ある日図書室に生徒を連れて行って授業をしているところに、他クラスの男子が一人入ってきた。「どうした。自分のクラスに帰りなさい」と声をかけると、彼は「うるせえ」と叫びながらそばにあったパイプ椅子を私の顔めがけて振り下ろした。火花が飛んだような気がしてしばらく私は何もわからなくなった。生徒が他の先生を呼びに行き、その男子生徒は職員室に連れて行かれた。その後のことはよく覚えていないが、校長から「とにかく被害届けを出した方がいい」と言われて、私は警察署に行くこととなった。

取調室で刑事と向き合っているいろいろな話をした。そこは少年の取調べに使われる部屋のように、狭く小さい窓がある暗い部屋だった。机には、取調べを受けた少年が書いたであろう数々のイタズラ書きや、ナイフの傷がついていた。

この時は私の意図ではないにせよ、結果的には警察に被害届けを出すことになってしまった。教師としての力量が無いようで非常に情けなかった。

警察の介入は、学校も決して望んでいることではないと思う。しかし一部の学校は大げさではなく本当に戦場のような状態で、そこでは教師も一般の生徒も自分の身を守るだけで精一杯になってしまう。どうして戦場になってしまったのか、そこから考えなくてはいいけないのだが、その場に置かれたらそんなことを考えている余裕はないのである。

荒れた学校では教師はあまりにも無力だ。荒れの原因を解決することは学校だけでできるものではないと思う。だからと言って警察等の権力が介入したら、事態はもっと悪くなってしまおうとも思う。いったいどうしたらいいのだろうと迷いながら、現場は今もその場の対応に追われている。

### 元中学校教師の方

10年ほど前、非常に「荒れていた」中学校で、教師と一部の保護者が立ち上がり、日弁連「子どもの人権救済センター」に人権救済の申し立てをしました。それを受けて弁護士グループが学校にはたらきかけて、一定の成果を上げたという例が私のいた学校です。

私は産休補助教員として、東京都のある中学校に配属されました。正確には産休ではなく病欠を取った先生の代替だったので、期間は9月から翌年2月までと短いものでした。その中学校は地域では有名な荒れた学校でしたが、期間も短し臨時的教員にはあまり関係ないだろうと、少し無責任な気持ちで赴任したのです。でもそれは本当に甘い考えでした。

赴任した当日から、暴力や暴言との戦いが始まりました。一度でもひるんでは相手に弱みを見せることになると思っ、私は毎回しかたたり注意したりしていたのですが、それを見て彼らははやしたて、ますます暴力がエスカレートする有様でした。反応する先生が面白かったのでしょうか。まさに、もうどうしようもないという状況でした。

そんな状態がしばらく続いた後、給食の時間のことでしたが、パトロールしてあるクラスをのぞいたときに、私は驚くべき光景に出くわしました。なんとその教室では、真ん中で問題行動を起こす生徒たちがまとまって給食を食べ、その他の生徒は1列に壁に沿って机を並べて食べていたのです。担任は自分の机で黙って給食を食べています。教室の周りの壁にくっついて食べている生徒たちの怯えた顔。担任のあきらめきった顔……。それを見て思いました。学校の荒れの被害者は生徒たちなんだ。我々教員は、いざとなれば職員室に引っ込んでしまうことができる。でも毎日机を並べて学習している生徒たちは、いったいどれだけ怖い思いをして

いるのだろう。私たちが見て見ないフリをしたら、それはどれだけ彼らを傷つけ、絶望的な思いにさせるだろう。それだけはやってはいけないと思ったのです。

もちろん学校が何もしなかったわけではなく、しょっちゅう保護者を呼んで生徒指導は行なっていました。呼ばれた保護者の反応は様々で、子どもの前で大泣きしたり、一度など父親が教師の目の前で息子を殴りつけたこともありました。それを見て私は「この子はいつも殴られているうちに、物事を解決する手段は暴力だということを学んだのだな」と思わざるを得ませんでした。他人を見るとときに、彼らは自分より強いのか弱いのかという見方をするのだ。しかし、これはあまりにも悲しいことです。人間が人間である所以を失っていることになるではありませんか。

そこで、教師と一部の保護者が立ち上がり、日弁連「子どもの人権救済センター」に人権救済の申し立てをしたのです。それまでも保護者による学校パトロールなどは行われていましたが、完全に外部からの援助を受け入れたのは初めてです。学校というところはいわば聖域で、中で何が起きているのか詳しいことはほとんど外に知らされません。教員側にも「自分たちのことは自分たちで」という気持ちがあり、それが外部の人間の介入を拒否する姿勢になっている面があります。この学校の例は、そういう姿勢を改め、地域や社会と連携することの大切さを、私たちに教えてくれたと思います。

その後、弁護士グループが現場を視察したり、管理職や保護者と何度も話し合いを重ねたりして、2年後にこの学校は一応の落ち着いたを取り戻したと聞いています。

#### 子どもが取り調べを受けること 東京都在住の会員

最初是不運な事故から始まった。腕力が強いことが生きる証のようだった当時の息子は、日頃から反目していた上級生と一発ずつ殴り合ったところ、上級生は転倒して大怪我を負った。知らせを受け、私は職場からすっ飛んで警察に向かった。しかし、取調中で子どもに会うことは出来ない。玄関の堅い椅子で長い時間待たされた。目の前の中学の教師たちは無言でにらむようにこちらを見ている。自転車の登録以外で警察に来ることなど初めてのことであったから、どうすればいいのか全くわからない。言われたままに待ち続けるしかなかった。

子どもの取り調べは長時間に及び、途中、学校からの強い要請で、怪我を負った上級生の見舞いに行かざるを得ず、警察をあとにしたため翌朝まで子どもの姿も見えていない。ようやく子どもに会えたのは翌日の何時頃だったか今では覚えていない。かなり遅くまで取り調べを受け、彼がいつ、誰が

迎えに来て自宅へ帰ったのか、それすら母の私は知らなかった。

数日後、警察に呼び出されて子どもと共に出向き、調書を取られた。相手が大怪我を負っていたことで動揺していた私は、刑事に従うしかなかった。子どもはその誘導尋問のような問いかけに、言葉少なに返答する。そのやりとりがいつの間にか作文されていて、最後に読み上げられ、間違いがないかどうかの確認のあと記名押印したように思う。息子がいくつかの違いを指摘すると、調書を訂正することを渋り、細かいところはまあいいじゃないか、と言うような言葉で濁し、訂正してはくれなかった。

これは当たり前のことなのかもしれないが、警察の調書は刑事の作文に過ぎないと思った。起こした事件に対しての加害側の気持ちやその状況などはほとんど考慮されず、警察側の判断を確認するものでしかなかった。加害者はそうした存在なのか、と思わざるを得なかった。その後も息子は様々な事件を起こして警察のお世話になった。何度目の逮捕だったか、その取り調べに立ち合わせてほしいと要請したが、この親は何を言っているのかと言うような顔をされ、引き下がるしかなかった。警察の心証を害すれば、子どもに影響することが恐かった。

今思えば、付添人にあたるような人がついていれば、いたずらに恐れることなく、子どもの心に寄り添った適切な対応が出来たかもしれないと感じている。もちろん、すべては親である私自身の対応の悪さにあるのだから、警察の対応の悪さを今更あげつらっても意味はない。それに、刑事の中にも数えるほどだがいい人はいた。その人たちは役職ではなく、一人の大人として子どもに向き合っていたのかもしれない。そのことには敬服する。

#### 警察の助言

こんな話もある。友人に聞いたのだが、学校の策略から警察の助言により救われた、ということだ。ある地域で2つの中学で乱闘事件が起こった。学校側は、この事件をそれぞれの番長を追い出す格好のチャンスにしようと思ったらしく、大怪我を負った子どもの親である友人に対して、執拗に被害届を出すことを迫ったという。その進言を疑いもしなかった友人は、被害届を出すために電話をすると、刑事からの言葉は意外なものだったという。被害届を出せば、怪我を負った子どもの側の事件も調べなければならない。双方がケンカを仕掛けた訳だから、それなりの審判が下ることになる。だから、ここで被害届を出すのは得策ではない、とのことだったそうだ。そして、学校側はこの事件を契機に、それぞれの番長を追い出そうとしているのではないかと言われたそうだ。

もちろん、真実は分からない。だが、友人はそれまでの学校側の対応に、警察の助言に納得するものを感じたのかもしれない。

子どもの悲しい事件が後を絶たない。子どもたちは本当に追いつめられているのだと実感している。私たちに何が出来るのかを今一度考え、行動していきたい。

## 大学生の方

僕には親友がいる。大学の同級生だ。一般的には「変わった奴」だろう。いわゆる世渡り下手で、まわりを全く気にせず一人生活しているといった感じだ。目が少し悪いのか、たまにどこを見て話しているのかわからない時がある。

そんな彼となぜか親しくなった。そして彼はある日、自分の目が悪くなった理由を僕に話してくれた。

彼の目は斜視というらしい。中学一年の時同級生の遊び半分のいたずらで目を傷つけられ、失明一步手前の状態だったそうだ。当時この事故は彼の田舎では話題となり、新聞にも載ったらしい。学校での事故で警察も介入して捜査が行われたそうだ。友達いわく、自分はなにもしていないのに相手の少年から攻撃があった。当然相手の少年にはなんらかの罰があり、自分に謝ってくるだろうと思っていたのに、相手は事故の翌日から学校にも行き、謝ってくることもなかった。反対に自分は1ヵ月以上も入院した、と言う。そして警察からは、「少年法があるからしょうがない。仕方ないよ」と言われたらしい。

この話を聞き、僕は彼の思いを想像し、そして警察の対応に頭にきた。今からでもその警察官を見つけ出しなぐってやりたくなった。友達にとってこの事件は今でも尾を引いている。警察官がもっとしっかり少年法を理解し、少年法についてしっかり彼に説明してくれていれば、きっと今の彼はもっと違った人間になっていただろう。もう少し「楽に」生きられたはずだ。彼だって相手少年に厳罰を望んでいたわけでは決してない。

また、この話は僕に被害者との関わり方の大切さを教えてくれた。そしてその初めの人間になるだろう警察の役割の大切さを。いったいどれくらいの警察官がこのことを理解し実践しているんだろうか。警察官一人ずつに、「お前らの対応が一人の人間の人生を変えてしまうくらい影響あるんだぞ!!」って言ってやりたい。

今親友は東京で就職活動中だ。田舎には帰りたくないという。この理由を僕は知っている。リクルートスーツの彼を見ながら、僕はいつか彼のしこりを少しでも柔らかくしてやりたいと心から思う。